168 アルコール性肝障害例に対するコロイド肝シンチグラムの臨床的意義の検討

浜崎幹二、山本和高、中島鉄夫、外山貴士、石井　靖
（大阪赤十字病院　ＲＩ室、福井医科大学　放射線科）

臨床的にアルコール性肝障害と診断された症例のコロイド肝シンチグラムを、Ｘ線ＣＴなどの画像検査と比較し、その臨床的意義を検討した。

対象は３４例で、Tc-99m phytate 185MBq を投与し、planar像の撮影後に SPECTを実施した。

２例において、肝内の放射能の局所的な増加が認められた。Ｘ線ＣＴでは、その部分に不整な低吸収域がみられ局所的な脂肪肝の存在がうかがわれた。逆に５例で、主に肝右葉前区に、放射能の低下域がみられたが、Ｘ線ＣＴでは、特に異常所見が指摘できなかった。これは、肝の線維化によるものと推定されたが、占拠性病変との鑑別が重要と考えられた。

169 部分的脾動脈塞栓術施行例の肝シンチグラフィー－肝機能の推移の検討－

田内美紀、井口博善（健康保険鳴門病院放射線科）
増田和彦、美馬伸章（同、内科）岩坂尚仁（同、外科）

肝硬変症や特発性門脈圧亢進症に伴う脾機能亢進症による汎血球減少の改善療法として、部分的脾動脈塞栓術（PSE）が近年施行されるようになってきた。我々は1987年７月から1991年５月までに脾機能亢進症15症例にPSEを施行し、うち肝硬変症単独の５症例および肝硬変合併肝細胞癌７症例にPSEの効果判定のため肝シンチグラフィーを施行し、同時に肝機能に及ぼす影響についても画像的に評価を試みた。PSE施行後、肝硬変単独症例は肝機能の改善あるいは長期間安定する傾向にあったが、肝硬変合併肝細胞癌症例は全例にＴＡＥあるいは抗癌剤動注を反復併用しているためか肝シンチ上、肝機能障害が増悪する傾向がみられた。

170 門脈血流比と血清７Ｓコラーゲン値-RIA（その１）：門脈血流比に関して

政井　章、星　宏治、木村和衛（福島医大 放）、藤田悠治、宗像志朗、佐藤善二（太田西ノ内病院 放）、加藤和夫、鈴木　晃、佐藤勝美（福島医大 核）

我々は、以前より肝シンチ（Tc-99m-phytate）施行時にdynamic studyを併用し、平田ら*の方法に基づき門脈血流比を算出し、臨床診断に応用してきたが、今回、線維化程度を反映する指標として開発された血清7Sコラーゲン値-RIA（7S値：日本DPCコーポレーション）を使用する機会を得た。そこで、肝疾患群をさらに細分化し、門脈血流比の有用性(結果：その２に記載)、7S値の有用性(以下、その２)、両者間、即ち、門脈血流比と肝線維化程度との相関関係の有無につき検討を行った。

＊平田和文、他：肝臓．26：74-79、1985

171 門脈血流比と血清７Ｓコラーゲン値-RIA（その２）：血清７Ｓコラーゲン値と両者の相関

星　宏治、政井　章、木村和衛（福島医大 放）、藤田悠治、宗像志朗、佐藤善二（太田西ノ内病院 放）
加藤和夫、鈴木　晃、佐藤勝美（福島医大 核）

各種肝疾患の内、代表的な疾患での門脈血流比と7S値は各々、肝硬変(27例) 47.3±11.4%、9.6±3.2 ng/ml、慢性非活動性肝炎（21例）66.0±7.2%、4.9±1.0ng/ml、慢性活動性肝炎（18例）57.7±9.7%、9.2±6.7ng/mlであり、それぞれ病勢に応じた数値を示した。門脈血流比と7S値の相関では、両者間に明らかな相関を認め、門脈血流比の低下した症例ほど7S値が高値を示すとの結論、即ち、7S値は、線維化程度に加えて、肝循環動態から見た肝予備能を反映する指標と成り得ることが示唆された。尚、検討は、肝癌、肝転移、肝外疾患症例等に関しても行った。

172 SPECTによる局所肝血液量及び局所α値の測定

中沢圭治、石井勝己、池田俊昭、田所克己、西巻　博、西山正吾、片桐科子、石井鋭尚、敬池　敬、依田一重、松林　隆（北里大学放射線科）

^{99m}Tc-RBC 及び^{99m}Tc-HSA 並びに SPECT を使用して、局所肝血液量及び肝ヘマトクリット値と末梢静脈血ヘマトクリット値の比、局所α値を測定した。使用装置はGE社製Maxi400T シンチカメラと Informatek 社製 Simis３型コンピュータである。脳梗塞患者３例、13スライスについて、平均の局所肝血液量及び局所α値を求めた所、局所肝血液量は32.16mℓ／肝組織100ｇであり、局所α値は0.60であった。またα値を0.60として、RBC studyのみのデータ６症例、26スライスから平均の局所肝血液量を求めた所、33.26mℓ／肝組織100ｇの値が得られた。

173 肝シンチグラフィを用いた慢性肝疾患の診断－Fuzzy推論による検討

塩見　進、黒木哲夫、城村尚登、福田勝彦、植田　正、池岡直子、小林絢三（大阪市大第３内科）
池田穂積、小田淳郎、越智宏暢（大阪市大放射線科）

肝シンチグラフィの読影では主観的判断がかなり入ってくる。我々は肝シンチグラフィの読影にFuzzy推論を用い、慢性肝疾患における診断能を検討した。対象は健常者25例、慢性肝炎38例（非活動型12例、活動型26例）、肝硬変19例の計82例である。方法は^{99m}Tc-phytate 111 MBqを静注20分後に肝シンチグラフムを作成した。そのシンチグラムにおいて１）右葉/左葉比、２）脾腫、３）骨髄描出、４）肝の変形、５）肝内ＲＩ分布の５項目についてメンバーシップ関数を作成し、Fuzzy推論による診断を試みた。

Presented by Medical*Online